

2020年度 附属中学校 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

【学校像】

「豊かな人間性を育み、社会に貢献できる青年を育成する」という建学の精神をもとに 21 世紀を生きる子どもたちが知的社会で必要とされる「複雑な問題に対する解決能力」「クリティカルシンキング」「創造性」などの人工知能にはできない人間味のあるスキルを身につけるための教育を推進する。そのために、授業の形態ではなく「今何をしなければいけないのか」「どういう行動をとるべきなのか」を考えて学ぶアクティブラーニングを推奨する。しかし、その根底として我が国の教育を支えてきた「座力の育成」を教育の「不易」なものとして捉え、アクティブラーニングと対局をなすパッシブラーニングに対しても否定するのではなく、「流行」に流されることなく「座学」を確立し時代の変化に対応できる生徒を育成する。附属中学校においては「基本的生活習慣」の育成と定着(座力の育成)が将来の高校生活の基盤を形成するものと捉えて教育活動のあらゆる機会をとらえて育成を図っていく。

また、「国際化」が進む現代において、世界で活躍する人材の育成を念頭に「英語教育」「国際理解教育」を推進していく。特に、英語教育を進める上で「母国語」で物事を考えることの出来る「国語力」が重要であると位置づけ、自国の言語、自国の文化に対する学習を強化・育成する。

【生徒像】

「気づく心」「考える力」「チャレンジ精神」を教育の 3 本柱とし、すべての教育活動を通して、次のような生徒を育成する。

- 社会的規律を尊重し、豊かな情操を身につけた品位ある生徒
- お互いの人権を尊重し、学校や地域社会の中で協力・共同できる生徒
- 自主的、自律的な学習態度で学力の向上をめざし、異文化に触れることによって、21 世紀を担う若者にふさわしい国際的な視野を持った生徒
- ※ 真の国際人は自国の文化に深い知識を持つとともに、自らのアイデンティティーを見失わない視点で教育活動を推進する。

2 中期的目標

附属中学は各部・各学年で「基本的生活習慣の確立」を目標とし、附属中学生にとっては学芸高校への進学、そして高校へ進学をしてからクラスを中心としてリーダーシップを発揮できる生徒となることを目標としている。

※ 外部評価機関の「授業評価、クラス経営評価、保護者からの評価アンケート」を実施・分析し数値を示して改善を図っていく。この数値は「プラス評価」－「マイナス評価」であらわされる「指数」となっている。

例えば、60 指数は 80%のプラス評価－20%のマイナス評価のことを指す。したがって「60 指数以上」A、「59～20 指数以上」B、「19～20 指数以下」C、「20 以下」D と考えて評価・分析する。指数と書いていない数値については%の割合表記。

※ 校務分掌については高校と附属中学校は同一の組織として運営していく。

1 生徒指導を根幹に据えた学習指導と生徒のニーズに応えられる進路指導を推進する。

(1) 基本的生活習慣の確立

学力向上の基盤は「基本的生活習慣(座力)の確立」なくしてあり得ないという教育信念から昨年度に引き続き「気づく心の育成」「チャレンジ精神」「思考力の育成」に努め、自己管理能力(自制心)を高める。また、生徒を指導する教職員の資質を向上させるために機会あるごとに啓発を行って行く。特に附属中学校生徒については中学 3 年間で基本的生活習慣を確立させることが高校進学後の進路実現につながることを意識して指導していく。

ア、社会人としては許されない「遅刻」の防止に自ら努める「自己管理能力を育成」し時間を守ることの大切さを自覚させる。(自己管理)

イ、いじめを許さない学級、学年、学校「文化」を作り出し、生徒全員が安心して登校し学習できる学級・学校を目指す。(他者理解)

ウ、社会人として巣立つにふさわしい「服装・マナー」の向上に努め保護者から信頼される教育環境を作り出す。(教養育成)

エ、SNS やメールの使用上のマナーを含め、相手の立場を踏まえた適切なコミュニケーションが図れるように指導する。(人権育成)

特に一人一台のタブレットを持たせているのでその正しい使い方を指導していく。

オ、教育裁判の事例を職員会議等で示して教職員の危機管理能力を高めるとともに「危機管理マニュアル」の作成を目指す。(危機管理)

(2) 学力向上と進路実現

学力向上の基盤は、生徒の「自己管理能力の確立なくしてあり得ない」という教育信念から教科学習、講習等様々な教育活動を通して時間の使い方を学ばせるため「学芸手帳」(バーチャルタイプ)の利用を促進し生活習慣を見直し時間の使い方の工夫から短期・中期・長期と計画的に学習活動(クラブ活動も含む)をする習慣を定着させる。

※ 生徒は「iPad」を所持しているが、アナログの「学芸手帳」に書き込みことにより一層自分のスケジュールの管理や目標に向かっての進捗管理・やるべきことを確認する To Do List を意識しやすくしている。

この「自己管理能力」を高める中で保護者・生徒の願いである「学力向上」「生活指導・社会力向上」という目標を実現できるように進路ガイダンスを行い、希望進路の発見・実現に寄与するため教育課程を編成(選択授業での対応や多様な講習の実施)するとともに「電子黒板(70 インチの黒板上を左右に移動できる液晶型)」「i-pad(一人一台)」「Wi-Fi 環境の整備」「スタディ・サプリ」「スタディ・サプリ・イングリッシュ」「管理自習室の設置」を利用した授業・講習を通して自学自習を推進し授業改善にもつなげていく。また、授業での利用だけでなくタブレット端末を利用した「職業調べ」「国際理解教育」(総合的な学習)を通してキャリア教育を進め将来展望に立った学習意欲の喚起を図っていく。

国際理解教育の推進のために英語 4 技能の育成を図るために分掌組織に「英語教育研究会」を立ち上げ、大阪教育大学の教授を招き研修に努める。また、英語授業だけでなく総合的な学習の時間における国際理解教育でネイティブ教員による授業を多く取り入れる。

「学習とクラブ活動」の両立をめざしながらも特に「英語教育」については重点を置き、中学校卒業段階で全員英検 3 級を目指す。

以上のように進路指導の基盤となる教員の授業力を高めていくため「生徒の授業アンケート」(年 2 回)(2020 年度については新型コロナウイルス感染症の影響により年 1 回の実施)と教職員間の相互授業参観等を実施し、授業内容の点検や教授法の改善の視点を知らせる。例年は 7 月の調査で改善すべき点を示された多くの先生が 2 学期に改善を図る。

ア、教育のデジタル化に対応し「電子黒板」「i-pad」「スタディ・サプリ」「スタディ・サプリ・イングリッシュ」等の利用促進を行い授業改善に努める。

イ、グローバル化に対応した教育活動を展開するため英語教育の改善と国際理解教育の推進をさらに図っていく。

ウ、教員に対する生徒の授業アンケートを実施し「自己の授業の振り返り」を行わせ授業方法の自己点検を行うとともに授業力向上のための相互授業参

観を行い「授業に対する信頼度」「学習効果への実感度」等を伸ばし生徒の満足度を高める。

エ、自ら課題を見つけ能動的に学ぶ習慣作りの一環として漢検・英検・数検などの資格試験受験の機会を増やす。

オ、生徒の多様なニーズに応えるために教育課程の編成、多様な講習の機会を設定し進路指導を充実させる。

(3) 社会に貢献できる資質の育成

「少子高齢化社会」「国際化」「外国人労働力の流入」「AIの進化」などの社会情勢の中、生徒たちは、自立・自律の精神とともに社会の中で自己を活かす精神と実力をもった大人として成長していかなければならない。生きていく社会の中で「自分は何ができるのか」「どう行動するのか」を考える視点を持たなければならない。本校がクラブ活動との両立を勧めているのも教科の学習だけではなく、学校行事やクラブ活動、ボランティア活動等を通してこれらの資質向上を図れると考えているからである。

特に子どもたちの生活の基盤となる「クラス」において互いに助け合う精神の確立が大切だという認識のもとに教育活動を行っていく。

ア、ボランティア活動(大阪マラソンへのボランティア参加等)やセレッソとのオフィシャルパートナー契約、エコ活動、地域清掃活動を通して社会への関心を高めるとともに奉仕の精神を育成する。今年度より国際ボランティアの取り組みとして公益財団法人大阪国際交流センターと提携し、留学生のイベント等にボランティアとして参加をする。

イ、クラブ活動を活性化させ、勝利をめざし努力する過程で持続力や耐性を養い、仲間と協力しあう姿勢(協調性)を育成する。

ウ、体育大会や文化祭等の行事を通して他者への思いやりや自分の意見を分かるように相手に伝える力(コミュニケーション能力)、調整力を育成する。

(2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響で文化祭は中止。体育祭も高等学校との合同開催は中止とし、附属中学校のみの体育祭とした。)

エ、日々の授業に対する姿勢こそが「集中力を養う最適の手段」であり、学習とクラブ活動・奉仕活動・学校行事への取組等を両立する中でこそ「生活体験に基づいた生きた知識(智恵)を育成できる」という観点で教育活動を進める。

2 保護者に信頼される学校づくり

(1) 保護者への情報提供

「校区という地域」を持たない私立中学校は、保護者との連携をいかに図っていくかが大きな課題といえる。子どもが勉強や各種行事で活動する姿が見えるように情報発信の質を高めていくことが大切だと考える。その基盤となるのは子どもたちが担任をはじめ教職員を信頼し、学校生活を充実して過ごしている姿を家に帰ってきた子どもから保護者が感じることができるようにならなければならない。成績懇談や保護者集会を充実し、生徒や保護者が知りたい情報発信となるように情報の質を高めていく。

このために保護者対象のアンケートを行い、本校の教育活動の振り返りと改善点を明確にする。

ア、保護者の学校への信頼度(生徒・保護者へのきめ細かな対応と学校生活の充実)を高めていく。

イ、学校からの情報発信力を高め、ホームページの閲覧者数を向上させ、開かれた学校づくりを通して保護者との信頼関係を深める。

ウ、成績懇談や進路ガイダンスを充実し保護者・生徒に質の高い豊富な情報を発信し幅広い選択肢の中から進路を決めていくことのできる環境づくりに努めていく。(2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響で一部縮小。)

(2) 危機管理体制の確立

異常気象の表れと思われる局地的豪雨・巨大台風の上陸をはじめ、いつ来るかも知れない地震への対応を考え、生徒の安全を第一にした防災体制を地域社会とも連携し構築していくことが求められている。特に大和川の水位上昇で帰宅困難となった場合の対応に関係機関と連携し構築していく。

ア、避難訓練(火災時の避難経路と地震時の避難経路の区別)を通して集団で避難するときの心得を育成し、災害に備える。

イ、学校として帰宅難民となる生徒が出た時を想定した避難物資等の準備体制や保護者との連絡体制を整える。

また、日々の教育活動の中で「危険予見義務」と「危険回避義務」を教職員の使命と認識し、事故防止にも努める。万一の災害・事故に備えた保険についての知識を高め教職員賠償保険や第三者賠償保険等にも加入して教職員・生徒の保障に努める。

【自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

〈自己診断の結果と分析〉

1 基本的な生活習慣の確立

保護者アンケート「生活指導は充実していて規範意識と自律性の育成に十分な効果をあげているか」という質問は附属中学校では78%の高い支持を受けている。この数字と比例して「この学校に入学させて良かった」という肯定回答が附属中で82%の指示となって現れている。保護者が本校の教育に期待している項目に「生活指導・社会力向上」(学習指導・学力向上について附属中で第2位)が入っているのと一致している。また、「本校の特色は何か」という質問で第1位が「子どもたちがいきいきと学習や部活に取り組んでいる」第2位が「クラブ活動と学習の両立」への評価が高いことから保護者の大半が子どもの学力向上・進路保障だけでなく本校の教育目標の「社会に貢献できる青年の育成」に賛同していることが分かる。この目標達成のために「遅刻」「服装」等のルールの遵守を指導目標としてきた。遅刻については、時間管理が出来なければならず、親に頼ってはだめだということを機会あるごとに該当生徒やクラス指導で訴え、「遅刻は他人の時間を奪う行為」と言う意識の定着を図って行く。

また、附属中学校の生徒には「遅刻をしない」ではなく、「遅刻をしないためには何時に最寄りの駅に着いたら良いのか」「何時に家を出たら良いのか」というように具体的な生活計画を立てさせる。

遅刻・服装の指導だけではなく、挨拶をすることの大切さを話し、理解と納得があつて自ら挨拶をするように話している。徐々にではあるが挨拶をする生徒の比率が増加している。

【学校協議会からの意見】

1 基本的な生活習慣の確立

○ 令和2年度は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の急速な拡大のため、年度の最初から休校を余儀なくされました。休校期間中(3月～5月)、生徒は自宅での「オンライン学習」を続けました。「家庭」⇒「学校」⇒「家庭」という従来の生活パターンが急に変わり、新しい生活リズムに慣れるのに大変だったと思います。附属中学校の保護者が本校の教育に期待している項目の一つに「生活指導・社会力向上」が挙げられています。中学生は基本的な生活習慣の確立に至っていない生徒も多いかと思えます。保護者が生徒の身の回りの世話をする割合も高校生に比べるとやはり多いと思えます。休校期間中、保護者も大変なご苦労があったと思います。「学校に遅刻しないように起床する」、「服装・身だしなみを整える」、「挨拶をする」といった規則正しい生活習慣・礼儀の励行は、学校に登校することなく家で一日の大半を過ごす生活では、ともしれば疎かになりがちだったのではないのでしょうか。生徒の基本的な生活習慣を崩さぬよう、オンライン学習は学校の時程に合わせて、朝は担任による出席確認から始まり、授業後もやはり担任がHRを実施したとのこと。オンライン画面でも、学校に居る時と同じではないにせよ友達や先生と繋がりは保てます。しかし実際は自分の部屋に居る。こういう二元的でバーチャルな状況を生徒はどのように感じ、受け入れたのでしょうか?果たして中学生にとって、「在宅学習」はどういう環境であったのか?休校期間中の生活状況、学習状況に関するアンケート等のデータがあれば、ご紹介戴けたらと思います。

いじめ行為は、保護者アンケート「差別やいじめがなく安全で安心して登校することができる」との回答が72%と高い数値となっている。油断することなく早期発見を目指して5月と11月にアンケート調査・教育相談を行う。クラブ活動においても練習終了後、着替えた後のミーティングで生徒の様子を観察するように教職員を指導している。さらに、生活指導の事例を職員会議時にプリント配布し、日々注意喚起を教職員にすることで教員の生活指導力の向上にも努めてきた。

特に今の子どもたちは大人が想像する以上のストレスをためており、小さいいじめが引き金となって自死するに至ることを考えこどもの言動に注意を払うように啓発していく。

一方、学校現場を悩ませているSNSについては、i-padを利用した教育活動が実施されており、「ソーシャル・メディア・ポリシーの確立」に向けて今年度も方針を明確にして取り組んできた。しかし、全くなくなるということではなく、継続的にクラス、学年集会、全校集会で訴えていく必要がある。

2 学力向上と進路実現

附属中の基本方針は「学習とクラブ活動の両立」である。

「子どものやる気を引き出し、学習活動に前向きに取り組んでいる」という質問についても肯定回答が67%であり、「全科目にわたり学習指導は充実しており、学力向上に十分な成果を挙げている」という問い（保護者アンケート）についても63%が肯定的な回答となっている。生徒たちにとって日々の授業で大切なのは学力向上実感であり学力向上は勿論、相関が大きい「先生の好感度」をあげる必要がある。「先生の好感度」については、全体では59%（昨年63%）であり4%下がっている。特に昨年の1年（53%）今年の2年（54%）が低くなっており学年として改善する必要がある。比例する形で学力向上実感（この授業を受けて学力があがったと実感できるか）についても全体では53%となっている。同様に2年の学力向上実感が、42%と低くなっている。

ハード面では、すべての教室に電子黒板が設置され、Wi-Fi環境も整ったことで、全員がタブレット（i-Pad）を持つようにした。授業での活用や課題提出などで利用し、さらにスタディ・サブリ、スタディ・サブリ・イングリッシュを導入し、自学自習を促し学力向上を図っている。

今年度の新型コロナウイルス感染症による臨時休業期間から積極的にオンライン授業や教育アプリを利用した。全員がタブレットを所持し、Wi-Fi環境を整備していたことが大変役に立った。また、進路指導については、附属の中学校であるが併設の高等学校に進学する際も他校生と同様、高校受験を課している。「先取り教育をしない学校」である分、中学3年間の学習内容を定着させる取り組みを行う。特に受験を見据えた形で学習を行っていく。また、他校受験の生徒に対してもきめ細かく、進路相談を実施していく。

3 社会に貢献できる資質の育成

本校は、「勉強とクラブ活動の両立」を奨励している。これはクラブ活動を通して先輩と後輩の在り方、未熟な生徒にどのように教えれば向上するのか、そのためには自分はどのような背中を後輩に見せればよいのか等を経験する中で真の奉仕の精神が生まれるものと確信しているからである。高校生とともにボランティアサークルを組織し、大阪マラソンへのボランティア協力（今年度は中止）やセレッソ大阪のホームゲームボランティアにも多くの生徒が参加した。子どもたちの心に「奉仕の精神」を醸成できたと考える。クラブ活動についても運動クラブだけでなく文化部の活動も多くなってきた。附属中学校の利点を活かし、高校生とともに活動することで技術面だけで無く大きく成長をしてくれ、逆に高校生にとっても中学生がいることがプラスに働いている。行事について、文化祭は中止であったが中学校のスポーツ大会、体育祭を実施した。コロナ禍の制限がある中での開催であったが、学年を超えた一体感を創っていくことができた。

4 保護者への情報提供

保護者アンケート「学校のホームページは充実していて必要な情報を得ることができる」の回答は83%の肯定回答が得られた。また、保護者から見て「担任は相談しやすく、親切に対応してくれる」というアンケートは

○ コロナウィルスの感染拡大は、あらゆる生活局面で「対面」型のコミュニケーション手段を抑制し、「オンライン」型のコミュニケーション手段を一気に加速させました。しかしSNSに代表される「対面」を必要としないコミュニケーション手段は、ともすれば表面的・一方的になりがちです。そのことが原因となって、人間関係の誤解を招いてしまうこともあります。生徒達は「オンライン」の利便性を享受しながらも、「基本的生活習慣」を始めとする、社会生活の基盤となる「ルール」や「道徳」を大切にしたいと思えます。

○ 「いじめ行為」、「SNSによる嫌がらせ行為」の危険性や問題点は、重要な生徒指導上のテーマです。「自己診断」では、保護者アンケートの肯定回答（88%）に油断することなく、5月と11月に実施するアンケート調査・教育相談、クラブ活動後のミーティング時の生徒の様子を観察等、いじめの事実や兆候を早期に発見するため、きめ細かい対策を講じていると評価できます。「SNSによる嫌がらせ行為」については、学年集会、全校集会で繰り返し訴えて行く必要性について言及されています。ソーシャル・メディアに対する生徒の意識を如何に高めて行くか？ SNSが持つ「利便性」と表裏一体の「危険性」について、具体的な事例に基づき、生徒に学んで貰う機会を出来るだけ多く設けて戴きたいと思えます。

○ SNSによる「嫌がらせ行為」でなくとも（本人に自覚や悪気がなくても）、例えば、安易なネットへの画像や動画の投稿が「他者のプライバシーを侵害する」、「他者の権利を侵害する」、また逆に「自分のプライバシーが暴露・侵害される」、「投稿を見た人達から攻撃を受ける」等の事例も多くなっています。高校生や中学生は、法的な知識や社会的相当性に関する判断能力も十分に備わっていません。「面白そうだから」とか「別に問題ないと思った」という程度の理由で行なった投稿によって、自分自身がいとも簡単に「加害者」にも「被害者」にもなり得る「危険性」、「怖さ」について、継続的に指導を行なって頂けたらと思えます。具体的・実践的に学ぶという観点から、この分野の実務を担っている専門家の講演、研修会等を実施するもの効果的ではないかと思えます。

2 学力向上と進路実現

○ アンケートで「子どものやる気を引き出し、学習活動に前向きに取り組んでいる」という肯定回答が67%、「全科目にわたり学習指導は充実しており、学力向上に十分な成果を挙げている」（保護者アンケート）という肯定回答が63%ということで、概ね肯定的な評価であるものの、今後の改善に繋げて戴きたいと思えます。

○ 授業評価アンケートの「学力向上実感」、「先生の好感度」についても、今後の改善に繋げて戴きたいと思えます。中学生の場合、高校生以上に「先生の好感度」という要素が重要ではないかと思えます。「子どものやる気」との相関関係も大きいのではないかと考えられますので、ぜひ改善に繋げて戴きたいと思えます。

○ 「ハード面」で特筆すべき点は、ICT環境の充実です。すべての教室に電子黒板が設置され、生徒全員がタブレット型端末を持っているという環境は大変優れていると評価できます。新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う臨時休校下において、在宅学習の実効性をどのように担保するのかが、全国的な課題となりました。日頃よりICT機器を実践的に活用している学校と、そうでない学校では、当然ですが学習環境に大きな差が出ると、新聞報道等でもなされていました。その点、大阪学芸は何年も前から、ICT環境の充実に力を注いできたことが、結果的にコロナ休校中の学習機会の確保に繋がったと評価します。

3 社会に貢献できる資質の育成

○ 大阪学芸の建学の精神である「豊かな人間性をはぐくみ、社会に貢献できる青年を育成する」を実現するための具体的な教育目標として、附属中学校が「勉強とクラブ活動の両立」を掲げていることは、大変良いことだと評価します。クラブ活動は、同じ目標を持つ仲間との「共助意識」、厳しい練習に耐え地道な努力を続ける「忍耐力・継続力」、上級生になると下級生の指導やクラブ運営に率先して当たる「リーダーシップの意識」、勉強とクラブ活動のバランスを図る「自己管理の能力」など、将来、社会に出た際に必要とされる資質を磨

93% (昨年度 89%)、肯定回答を得ている。私学は、地域という「校区」を持たないため、学校から保護者への情報発信のあり方が保護者との信頼関係を築く上で非常に重要なものとなる。これらが「知り合いや親せきにこの学校を進めたい」という肯定回答を 82% (昨年度 77%) となって現れている。

また「懇談会は適切な頻度で行われており、学校の様子をうかがい知る機会として機能している」という保護者アンケートの肯定回答が 88% (昨年度 78%) となっている。昨年度のアンケート結果からは 10% 向上している。以上から保護者との連携はまだ課題はあるとしても順調に推移しているとかんがえている。

5 危機管理体制の確立

本校は大和川以南からの通学者が多く、豪雨による氾濫・通行止めにより帰宅困難となる生徒が 3 分の 1 を超える。このため、例年通り 4 月より各自に教室保管用の避難物資を購入し、その対応を図ることが出来た。この取り組みは今後も進めていきたい。

くことが出来ます。附属中学校は、学校行事・クラブ活動ともに、高等学校に通う先輩とともに活動できる利点があります。公立中学校では実現が難しい点であり、これは附属中学校の教育の特色の一つになっていると考えます。何と言っても、同じ行事やクラブで高校生を手本とし、逆に高校生は附属中の生徒に対して教えたりすることで、附属中の生徒は「あの先輩のようになりたい」といった、身近で具体的な目標を掲げることが出来ます。少し年令の離れた先輩と後輩が互いに教え、学び合う関係性は、教育のあるべき姿の一つではないかと思えます。

- ボランティア活動に力を入れているのも、大変良いことだと思います。自分のことしか考えない「利己主義」ではなく、他者や周囲に対する思いやり、奉仕の精神等を育む素晴らしい取り組みだと評価します。本校とパートナー提携をしている「セレッソ大阪」のホームゲーム・ボランティアにも積極的に参加したことは高く評価できます。現在でも状況は大きく変わっていませんが、「コロナ禍」での大会・イベント実施にあたっては、様々な制約が設けられました。人数制限や入退場動線の工夫、アルコール消毒、密集防止策等々。生徒達はボランティア活動を通じて、「コロナ以前」と様変わりした運営形態に戸惑いを覚えたかも知れませんが、一方で、「社会」や「公共」のあり方は時どきの状況によって変わるという事実を知り、厳しい制約の元でも、社会活動を成り立たせるために、いかに多くの努力が払われているのかを学ぶ機会になったのではないかと思います。

4 保護者への情報提供

- 保護者アンケートの「大阪学芸のホームページは充実していて必要な情報を得ることができる」の肯定回答が 83%、「担任は相談しやすく、親切に対応してくれる」の肯定回答が 93% と、いずれも非常に良い数値結果が出ていることについては、高く評価したいと思います。
- 大阪学芸のホームページ画面は大変見易いレイアウト構成がなされていると思います。附属中学校、高等学校はそれぞれのカラーイメージで区分けされており、すっきりまとまった印象を受けます。そして閲覧者がメニューに従って、迷うことなく見たい箇所・目的のページに到達できる工夫が凝らされています。ホームページは附属中学校の教育活動を余すことなく紹介し、学校の対外的イメージ、評価にも大きな影響を与える重要なツールです。主観的な意見になりますが、大阪学芸のホームページは明るく、快活で開放的な印象を受けます。附属中学校の快活で伸びやかな校風とも、よくマッチしていると感じます。
- ホームページ以外にも、カラー刷りで見易い「学芸新聞」の発行、オンラインの配信ツールである「さくら連絡網」など、目的に応じた様々な情報提供の媒体が用意されています。「自己診断結果」にも書かれているとおり、『私学は、地域という「校区」を持たないため、学校から保護者への情報発信のあり方が、保護者との信頼関係を築く上で非常に重要なもの』です。これは本当にその通りだと思います。生徒・教員・保護者の三者間の意思疎通を円滑にすることは、教育目標を達成して行く上で不可欠の要素だと考えます。今後とも一層、学校の情報発信力を高めて欲しいと願っています。

5 危機管理体制の確立

- ここ数年、自然災害の頻度、規模が拡大しています。4 年前の大阪府北部地震の発生時、校内には数百名の生徒が居たと聞いています。鉄道再開・安全確認後に生徒達を帰宅させるため、急遽、大型バスを複数台手配して通学地域・方面ごとに乗車させ、同じ方面から通勤される教職員の方も同乗して、最寄り駅まで送り届ける措置を取られたとのこと。保護者にとっては大変心強い対応であったと評価できます。
- 上記のような事態は、今後も起こり得ます。自然災害については、生徒がすでに学校内に居る場合と、通学途上の時間帯の場合とでは、当然学校の対応も変わってくることでしょう。保護者からすると、生徒は家を出たものの、学校に到着していない時間帯に起こる災害は、学校の管理下でない状況にあり、安否・動静の確認に手間取るなどして不安が高まると思えます。非常災害時は携帯電話も繋がりにくいケースがよくあるので、「LINE」や「さくら連絡網」等をうまく活用することで、生徒・教職員ともに、状況に合わせた臨機応変な

	<p>対応が取れるようにして戴けたらと思います。</p> <p>○ 全般的には「中期目標」に書かれているとおり、「避難訓練」、「避難物資等の準備態勢」、「保護者との連絡体制」を整えとともに、自然災害に留まらず、生徒の生命・安全に関わる危機・危険については、日々の教育活動の中で「危険予見義務」と「危険回避義務」を教職員の使命であると認識して戴き、事故防止にも努めて戴くようにお願いします。</p> <p>○ コロナ禍の社会状況は現在も続いています。令和2年度の「臨時休校」のような状況は、二度と起こって欲しくないと思うところですが、自然災害同様、「いつ、何が起こるか」については誰も予測は出来ません。その意味では、万一の場合でも大阪学芸の教育力を落とすことなく、機敏に対応できる体制を構築することも、まさに「危機管理」ではないかと考えます。現場の先生方には大変なご苦勞もあると思いますが、ぜひ宜しくお願いします。</p> <p>○ ホームページには、新型コロナウイルスの感染防止対策が紹介されています。「サーモグラフィー」、「ウィルス除去フィルター」、「抗菌マット」、「クリーンゲート」など、様々な策が講じられています。学校挙げてコロナウィルスの感染拡大防止に努めていることは高く評価したいと思います。</p>

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 基本的な生活習慣の確立	<p>1 規律ある学校生活の確立</p> <p>(1) 規範意識と自立性の育成</p> <p>(2) いじめを許さない学校づくり</p> <p>(3) 教職員の学級経営・生徒対応能力の向上</p> <p>以上の三項目を達成する中で学習環境を整え学力向上をめざします。</p> <p>附属中学校の設立趣旨は子どもたちに「落ち着いた教育環境」を保障することにある。この教育目標実現のための教育活動を展開する。</p>	<p>附属中学校の設立趣旨にあるように「落ち着いた学習環境」を整え、私学の最大の教育目標である「学力保障」をする。</p> <p>クラス・学年の秩序は真面目な生徒たちによって支えられているという認識のもとに校則をきっちりとし、気づく心を持って困っている人たちに声を掛けることのできる生徒を育成する。</p> <p>(1) 風紀週間・下校指導・服装違反の点検を定期的実施し、生徒の規範意識向上を図る。</p> <p>○指導カードの発行による啓発</p> <p>(2) 「いじめアンケート」を実施し、担任・学年主任・生活指導部・管理職による点検で共通認識を図りいじめを許さない学校づくりに専念する。</p> <p>○いじめ対策委員会の実施</p> <p>(3) 学級の係活動や清掃活動を協力して行う雰囲気を作り真面目な生徒が損をしない、担任に不信感を抱かない学級づくりを行う。</p> <p>また、生徒の人間関係を深めクラスと言う仲間育成の場で担任のきめ細やかなリードのもとに子どもたちの良さを引き出すことのできる担任力を育成する。</p>	<p>(1) 現在の学校生活について「規則正しい生活を送れる」という指数を 60 以上とする。</p> <p>(2) 学校生活全般を通じて「この学校には、いじめは少ない」という指数を 60 以上とする。</p> <p>(3) 学級経営において</p> <p>①「生徒の態度や行動が間違っているときはきちんと叱ってくれるし、感情的にならず生徒が理解できるように配慮してくれる」指数を 50 以上とする。</p> <p>②「生徒間のトラブルは少なくクラスメートを大切に作る風土がある」という指数を 60 以上とする。</p> <p>(4) 「良い友人が多い」という指数を 60 以上とする。</p> <p>(5) 担任は「クラス生徒全員と話す機会を持つ」という指数を 40 以上とする。</p> <p>(6) 担任は「ホームルーム活動が充実して行えるように工夫してくれる」という指数を 50 以上とする。</p> <p>(7) 「クラス全体で取り組む活動を通して一体感が持てるようにしどうしてくれる」という指数を 45 以上とする。</p>	<p>(1) 1年 62、2年 32、3年 27 で全体としては 48 (昨年度 64) となっている。昨年から 16 指数下がっており、大幅な減となっている。1年生にとっては初めての中学校生活であるが、2・3年生にとっては昨年度との比較となってしまう。中学生にとっては4月からの新型コロナウイルス感染症による臨時休業の影響が大きい。</p> <p>(2) 1年 20、2年 3、3年 53、全体で 12 (昨年度 52) と逆に 3年生では学校生活が確立されているため大きなマイナスはないが、学校生活が短い低学年は人間関係の構築が出来ていない状況にある。担任を中心にきめ細かく見ていく必要がある。より高い質の意識向上を図るために「いじめアンケート」の実施と全体指導をしていく。</p> <p>(3) ①1年 82、2年 60、3年 66、全体で 69 となり高い数値は維持しているが 2年生の数値が悪くなっている。</p> <p>②1年 44、2年 35、3年 64、全体で 48 である。3年生では高い数値であるが1年・2年では、目標とされる指数 60 からは大きくかけ離れており、他人の気持ちを考えた行動・発言を継続指導していく。</p> <p>(4) 良い友人が多いという評価では満足度指数が 1年 67、2年 45、3年 78、全体で 57 (昨年度 78) と全体の目標が 60 を切っている。コロナ禍の2年生が人間関係を構築できていない。</p> <p>(5) 1年 56、2年 55、3年 53、全体で 58 と高い数値を示している。</p> <p>(6) 1年 68、2年 38、3年 45、全体で 52 と高い数値を示している。</p> <p>(7) 1年 53、2年 52、3年 67、全体で 57 と高い数値を示している。</p>
	2 学	<p>2 学力向上と進路実現に向けた取り組み</p>	<p>附属中の設立趣旨は高校進学後につまづかない基礎学力の定着であ</p>	<p>(1) 相互授業参観を実施する。</p>

<p>力向上と進路実現</p>	<p>(1) 生徒による授業満足度の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 授業アンケート ○ 教育のデジタル化 電子黒板とタブレット利用の促進 ○ 英語教育の改善 <p>(2) 自学自習の態度を養成し意欲的に学習する姿勢を身に着ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ スタディ・サプリ・管理自習室の利用促進 ○ 英検・漢検等資格試験受験の促進 <p>(3) 希望進路の発見と実現に寄与する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 国際理解教育の促進 ○ 多様な講習の充実 	<p>る。このため教師の授業力向上は本校教育の根幹をなすと認識している。</p> <p>授業力評価のアンケートを分析すると授業を受けて「学力向上実感」があると評価された先生は「好感度」においても高い数値をあげています。この保護者の信託に応えるために次のような取組をおこなう。</p> <p>(1) 授業力の向上をめざし、例年は7月実施の1回目の授業評価で「何が評価を下げる原因となっているのか」「どの点を改善すればよいのか」を自己研鑽させ、2回目の授業評価で数値改善をはかっている。4月から臨時休業となり、授業評価は10月の1回のみになったことで、数値には表れないが、10月以降の改善を実施した。また、主任を中心に担任・教科担任がクラスの授業の状態を把握し、問題がある場合はすぐに改善策を打つ体制を整備する。</p> <p>(2) デジタル教科書が急速に普及してくることに対応して全館整備が終了した電子黒板に加え、i-pad を利用し授業改善に取り組む。</p> <p>コロナ禍でのオンライン授業、双方向学習を実施。(Google Classroom、ロイロノート、Zoom 等を活用)</p> <p>(3) 英語改革に対応し英語教育研究会を立ち上げ本校の英語教育について見直し改善を図る。</p> <p>(4) スタディ・サプリ、スタディ・サプリ・イングリッシュを導入し生徒の学習環境を整え自学自習を推進する。</p> <p>(5) 英検・漢検等の資格取得者を増やしていく。</p>	<p>授業アンケートを実施し次の項目のプラス指数を向上させる。</p> <p>(2) 教員の「好感度指数」を60以上とする。</p> <p>(3) 「先生の授業を受けることにより学力や知識の向上を実感できる」という学力向上実感指数を60以上とする。</p> <p>(4) クラスにおいて「授業時間は集中して授業を受ける生徒が多い」という指数を60以上とする。</p> <p>(5) 「全科目にわたり学習指導は充実しており、学力向上に十分な成果をあげている」という保護者アンケートの肯定的意見を60以上とする。</p> <p>(6) 「子ども達のやる気が引き出され、学習活動に前向きに取り組んでいる」という指数を40以上とする。</p> <p>(7) 「授業の理解度」という指数を60以上とする。</p> <p>(8) 電子黒板を利用した公開授業、タブレットを使用した授業研究を年2回実施する。</p> <p>(9) 中学3年生時、英検3級以上の資格保持者75%以上とします。</p> <p>(10) スタディー・サプリの初期設定ログイン95%を目指す。</p> <p>(11) 英語教育改善の方策を打ち出す。</p>	<p>確立が急がれる。「授業参観レポート」を作成し相互授業参観を昨年度に続き実施したが、普通の授業で互いにコミュニケーションをとって点検しあい高め合うまでには至っていない。また、教科会で指導案等の点検・意見交換等もはかられていない。</p> <p>(2) 教員の生徒からの好感度と学力は比例するものである。平均好感度は全国水準の66指数に対して本校は59指数となっている。昨年度から7下がっている。好感度は学力向上実感とも相関があるため、改善の必要がある。</p> <p>(3) 学力向上実感は53指数(昨年度56)となっている。この2年間は向上してきたが若干の低下が見られた。特に2年生が42と言う数値になっており中だるみの傾向が見られる。高校へ進学する際の学力向上が得られるように一層の努力を要する。</p> <p>(4) 指数としては1年26、2年27、3年47、全体で33となっている。全体としては昨年と変わっていないが1・2年で昨年を下回っており、3年だけが良くなっている。授業の姿勢が学力向上には欠かせないため、早急に改善する必要がある。</p> <p>(5) 肯定的な回答が63(昨年度58)であったのに対し否定回答が30(昨年度38)となっている。保護者の感じ方に差があるため、きめ細かく生徒を見ていく必要がある。</p> <p>(6) 肯定的意見に回答してくれた保護者は67指数となっている。昨年度と変化はない。</p> <p>(7) 1年73、2年60、3年68で全体では67となっている。</p> <p>(8) コロナウィルス感染症の影響により各教科・教員での利用について大きく改善された。使用しなければならぬ状況下でICT教育・タブレット利用については大きな進歩をしている。今後も一層効率的な利用をしていく必要がある。</p> <p>(9) 英検3級以上の合格者は48%で目標ラインに到達できなかった。資格試験受験への意識付けと共に一層の努力が必要である。</p> <p>(10) 本校の教育の柱となる「自学自習」を進めるためのスタディサプリのログイン数は100%となり当初の目標は達成されている。</p> <p>(11) 週6時間の英語授業の内、教科書内容については4時間。残りの2時間についてはネイティブ教員と分担をしながら授業を進め、4技能に対応する英語教育を行っている。また、総合学習の中で国際理解教育を2時間実施し、様々な調べ学習や発表も行っている。</p>
<p>3 社会性の育成</p> <p>(1) 助け合う雰囲気あふれるクラスづくり</p> <p>(2) 部活動の活性化</p> <p>(3) ボランティア活動の充実</p> <p>(4) 学校行事の充実</p>	<p>学校教育の目的は、教科指導による学力の向上とともに多様な体験活動を通して集団の中で協調性や耐性、社会性を育てることも大切な使命である。本校が「両立」を合言葉に部活動を推奨している理由もここにある。</p> <p>(1) クラス経営力を向上させるため学年会での相互点検・改善を進める。</p> <p>(2) クラブ活動の成績と普段の学校生活は密接に関係することを指導しクラブと学習の両立を図る。</p>	<p>(1) ①「クラス全体の結束力が強く行事の中で達成感や一体感があると感じることが多い」②「困っているクラスメートがいれば誰に対しても手助けをすすめる生徒が多い」という指数を60以上とする。</p> <p>(2) 「部活動が盛んで、部活動に関して熱心な指導が行われている。」という保護者アンケートの数値を60以上とする。</p>	<p>① 1年54(昨年度72)、2年52(昨年度86)、3年68(昨年度78)、全体で58(昨年度78)指数という結果が出た。コロナの影響で学校行事が中止となりクラス全体での取り組みが出来ていない影響がある。</p> <p>② 1年54、2年36(昨年度65)、3年66(昨年度51)指数、全体で52(昨年度55)となっている。全体では一昨年から大幅に改善をされているが昨年と大きくは変わっていない。しかし、2年生の数値が低く「他人を思いやる心」を育てる教育が早急に必要である。全体ではB評価なので継続して教育していく必要がある。</p> <p>(2) 肯定回答75に対して、否定回答が14となっ</p>	

		<p>(3)ボランティア活動の充実 地域清掃を定期的に行い、ボランティアサークルでは大阪マラソンボランティア活動(中止)への参加やセレッソ大阪ホームゲームでのボランティア活動を進める。</p> <p>(4)生徒の自主性を育てる学校行事を促進する。</p>	<p>(3)「学校はいろんなことを体験させてくれる」という指数を60以上とする。</p>	<p>おり目標である60を達成している。部活動の加入数も多く、学習活動との両立が図れている。</p> <p>(3)1年50(昨年度64)、2年38(昨年度78)、3年8(昨年度54)、全体で44(昨年度70)となっている。コロナウィルス感染症の影響で学校行事が中止され体験が出来ない状況にあった。行事を体験している高学年になるほど当然数値が悪くなっている。一日でも早いコロナの収束が望まれる。</p>
3 信頼される学校づくり	<p>3 保護者との信頼関係の醸成</p> <p>(1)保護者と信頼関係の構築</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ホームページの充実 ○ 学芸新聞の発行 ○ 進路だよりの発行 <p>(2)防災教育への取り組み</p>	<p>附属中学校の保護者は地元の公立中学校に通学させないで遠い私学に子どもを通わせていることを考えると保護者との連携は高校以上に密にしなければならない。家庭訪問に変わる「保護者集会」「学級懇談会」「授業参観」等を計画的に実施し、「わが子の様子が見える」学校にする。</p> <p>また、防災訓練等の安全生活に対する取組も緊急の課題であるという認識している。</p> <p>(1)担任のきめ細かな対応</p> <p>体罰・暴言のないクラス・クラブ経営と教科指導を確立するための職員会議等を通じた啓発活動を進める。</p> <p>(2)ホームページの充実</p> <p>ニュース、トピックスにて更新内容を周知する。</p> <p>(3)授業参観や進路・生活指導についての保護者集会を充実</p> <p>教員と保護者の距離感を縮め話しやすい環境づくりを行う。</p> <p>(4)保護者が学校行事に来やすい環境を作る。</p> <p>(5)学芸新聞の発行</p> <p>(6)防災教育の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ○避難訓練(火災時と地震時に分けて)の実施と防災備品の整備を行う。 <p>また、附属中学生は電車等で通学している生徒も多く、災害発生時に帰宅困難となることも想定し防災グッズを常備する。</p>	<p>(1)「授業参観や懇談会は適切な頻度で行われていて学校の様子をうかがい知る機会として機能している」という保護者アンケートの肯定意見を60以上とする。</p> <p>(2)「入学前と入学後の学校のイメージは子どもに聞くと良くなった。この学校に入学させて良かった」という数値を40以上とする。</p> <p>(3)担任は「生徒に対する言葉遣いや態度は丁寧で適切であると感じることが多いし、保護者らも誠実に対応してくれる」という肯定回答を80%以上とする</p> <p>(4)「学校は一人ひとりの生徒を大切にしてくれる」という数値を45以上とする。</p> <p>(5)学校からの情報発信源となるホームページの閲覧数を20,000/月以上とする。</p> <p>(6)大和川決壊や地震等災害による帰宅困難者対応を引き続き行います。</p>	<p>(1)88%(昨年度78%)の肯定意見があった。肯定意見が目標に対して大きく上回っている。コロナの影響で授業参観も実施できていないがオンラインの配信などを実施した。保護者は状況を良く理解していただき肯定意見が増加しているが、甘えることなく工夫をしていく必要がある。</p> <p>(2)保護者アンケートでは肯定回答が82%(昨年度77%)、否定回答が13%(昨年度20%)となり、肯定-否定の数値が69となっている。数値的には目標を大きく超えてはいる今後もロイヤリティを更に高めていきたい。保護者はコロナ禍での取り組みを評価していただいていると考えられる。生徒の「入学前よりもイメージが良くなった」という指数が1年48、2年2、3年10、全体で22となっている。指数であるためB評価となっている。保護者と生徒の感じ方に差が生じている。生徒の評価を上げていく必要を感じる。</p> <p>(3)生徒の回答としては肯定-否定の数値が1年52(昨年度12)、2年33(昨年度26)、3年60(昨年度46)で全体としても48(昨年度28)と大きく改善された。一昨年は全体で15という結果であったことを考えると年々改善はされている。しかし、B評価にとどまっているためさらなる改善が必要。保護者の回答については肯定回答が93%(昨年度89%)であった。厳しく指導する際の保護者と生徒の感じ方にギャップがあり、生徒に対しても独りよがりの指導にならないよう注意する必要がある。特に電話対応のきめ細かさが大切であり、家庭訪問のない私立学校では4月当初、懇談までに各家庭に担任から挨拶の電話を入れるように取組をさらに進めたい。</p> <p>(4)1年53、2年23、3年20、全体で39(昨年度56)指数となった。本校の特色は丁寧できめ細やかな対応にあると考えている。昨年から大幅な数値低下が見られる。特に学年を追うごとに数値が下がっているのが大きな問題である。より一層きめ細やかに生徒を見ていく必要がある。今後もこの方針を曲げないように教職員に啓発を続けて行くことが大切。</p> <p>(5)学校のホームページが充実していると考えている保護者は83と高い評価となっている。ホームページの閲覧者数の月平均は19,279回であり、目標を少し下回ってしまった。</p> <p>(6)昨年度に続き災害避難物資もすべての生徒に配布し教室保管することができている。教室に配置された備蓄物資にいたずらをする生徒もなく卒業まで保管されている。この物資を使わなくても良い日々が続くことを祈りつつ。</p>
特記事項	1 ICT教育・オンライン授業の工夫などコロナ禍での学習環境を整えることが出来た。			

		2 学校危機管理マニュアルを作成して生徒の安全生活に対する教職員の意識の向上を図った。
--	--	---